

2018年4月刊行

内容見本

小田 勝 著

読解のための 古典文法教室

A5 並製カバー装・本体 262 頁・別冊 36 頁
定価 2,200 円 + 税
ISBN978-4-7576-0857-3

全30講

286 の例題と解説で学ぶ、
大学生向けの古典文法の演習テキスト。

特徴①

現代語と対照した古典文法のしくみ
古典文を正確に読解するための解釈文法

同時に
学べる！

特徴②

例題解答は、巻末の現代語訳を要参照。

↳ 自主学習にも対応。

小田 勝（おだまさる） 國學院大學文学部教授。博士（文学）。

御採用、その他のお問い合わせは和泉書院まで。

〒543-0037 大阪市天王寺区上之宮町 7-6

☎06-6771-1467 F A X 06-6771-1508

和泉書院

目 次

- 第1講 古典文法への誘い
- 第2講 動詞（1） 動詞の活用／動詞化
- 第3講 動詞（2） 動詞の音便／動詞の自他／動詞の格支配
- 第4講 動詞（3）
..... 代動詞／ダイクシス動詞／動詞の意志性／複合動詞
- 第5講 受身・自発・可能 ヴォイス／受身／自発・可能
- 第6講 使役・助動詞の分類 使役／助動詞の分類
- 第7講 名詞述語文・「あり」の解釈・喚体句
..... 名詞述語文／代用形式「あり」の解釈／喚体句
- 第8講 否定
- 第9講 時制（1） テンス・アスペクト／き・けり
- 第10講 時制（2） つ・ぬ／り・たり
- 第11講 時制（3）・推量（1）
..... 局面動詞／結果キャンセル表現／現在／法助動詞／らし
- 第12講 推量（2） べし／なり／めり
- 第13講 推量（3）
..... 推量の助動詞／む／らむ／けむ／つらむ・ぬらむ・やらむ
- 第14講 反実仮想・意志・勧誘
..... 反実仮想／意志／勧誘・行為要求表現／禁止
- 第15講 希望・疑問 希望表現／疑問表現
- 第16講 形容詞
- 第17講 連用修飾・形容動詞・副詞
..... 連用修飾／形容動詞／副詞

第 18 講 連体修飾

第 19 講 準体句 準体句／同格構文／「の」助詞非表示の
同格構文／特殊な準体句／ク語法

第 20 講 格助詞 主格・目的格の格助詞の非表示／の・が・を／に・
にて／と／より・から／格の代換／副助詞・係助詞による格の内包

第 21 講 名詞の諸問題 無助詞名詞／様々な名詞／句の
名詞への圧縮／複数表示／名詞の並立／数詞

第 22 講 副助詞 副助詞／のみ・ばかり・まで／だに・すら・
さへ／し・しも

第 23 講 係り結び

第 24 講 複文（1） 条件表現／接続表現（1）

第 25 講 複文（2）・内容補充・移り詞 接続表現（2）
／ミ語法／終止形・連体形による文の中止／内容補充（準引用）／移り詞

第 26 講 挿入句・係り受け 挿入句／提示句／成分の句化／係り受け

第 27 講 敬語（1） 敬語のしくみ／主語尊敬語／尊敬の「る／らる」

第 28 講 敬語（2） 補語尊敬語／敬意の対象／自卑敬語

第 29 講 修辭的表現 比喩表現／物の見方に関する表現／
名辭変更／カテゴリー変様／情報操作

第 30 講 和歌の表現技法

..... 枕詞・序詞／掛詞／連立・反復の技法／縁語／歌枕

引用文献

別冊 例題文現代語訳

第8講 否定

[65]

助動詞「ず」

次の中から、否定の助動詞「ず」を抜き出し、その活用形を答えなさい。

- ① 桜花とく散りぬとも思ほえず人の心ぞ風も吹きあへぬ (古今83)
- ② 秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる (古今169)
- ③ 嘆けどもせむすべ知らに恋ふれども逢ふよしをなみ (万210)
- ④ 筒井つの井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざる間に (伊勢23)
- ⑤ 数^{かず}ふれば尽きせぬものは我がつめる稲と年との数にざりける (清原元輔集・書陵部蔵桂宮丙本)

古典語の基本的な否定形式は「活用語の未然形+ず」である。

- (1) 京には見えぬ鳥なれば、みな人知らず。(伊勢9)

「ず」は打消の助動詞で、3系列の特殊な活用をする。

(2)

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
○	に	○	ぬ	ね	○
ず	ず	ず	○	○	○
ざら	ざり	○	ざる	ざれ	ざれ

3系列のうち、ナ行系統の活用が最も古く、「ず」の形は、その古い連用形「に」にサ変動詞「す」が融合して成立したものと考えられている。(3)の「に+す」は「ず」の原形をうかがわせるものである。

- (3) そこ故に皇子の宮人行くへ知らずも [不知毛、一云、さす竹の皇子の宮人行くへ知らにす [不知尔為] (万167)

連用形「に」は③のように上代の文献にみられ、中古では(4)のように慣用表現にその姿をとどめる程度で用いられなくなる。

- (4) 言へば得^えに (=言オウトスルト言エナイデ) 言はねば胸にさわがれて心ひとつに嘆くころかな (伊勢34)

◆ナ行系統の未然形には「な」が想定される。次例の下線部はこの「な」である可能性がある（新全集の説。歌意から「なむ」は希求の終助詞ではありえない）。

・^{うべ} 諾な諾な 君待ちがたに 我が^け着せる ^{おすひ} 襲の裾に 月立た^なむよ（=水月ガ立タナイコトガアロウカ）（記歌謡 28）

「ざり」は、

(5) 心をだにか（=心ダケデモ）^{あひおも} 相思はずあらむ〔受阿良牟〕（記歌謡 60）

のような、「ず」に動詞「あり」が融合してできた、さらに新しい形で、中古では、助動詞に続けるときには、「ざら-む」「ざり-き」のように、「ざり」系列の語形が義務的に選択される。上代では、「ざり」が十分発達していなかったため、「思はず-き〔不思寸〕」（万 2601）、「恋やまず-けり〔受家里〕」（万 3980）のように、「ず」から助動詞に続いた例がみえる。中古では、助動詞には必ず「ざり」系統の形から続くが、④のように、「ざり」系統の形が用いられるのは助動詞に続くときだけとは限らない。しかし④は、中古和文では「見ぬ間に」の形をとるほうがふつうである。⑤の「ざり」は「ぞ（係助詞）+あり（動詞）」が約まったもので、打消ではない。

[66]

否定のスコープ

下線部を訳しなさい。

- ① a 諸天、太子に従ひて、その所に至りてたちまちに見えず。（今昔 1-4）
 b 「御^{おほむつき}坏遅し遅し」と言へども、疾^とくにももて来ず。…さて、御坏参らす。（今昔 28-5）
- ② よき細工（=工匠）は、少しにぶき刀をつかふといふ。妙観が刀はいたく立たず。（徒然 229）

否定表現で注意を要するのは、否定しているのは何か、という問題である。

① a は「たちまちに〔見えず〕」という構造、b は持って来はしたが、急には持って来ないの意で、「〔疾くにももて来〕ず」という構造と考えられる。このように否定の及ぶ範囲を「否定のスコープ」という。②は、「いたく〔立たず〕（=トテモ切レナイ）」ではなく、「〔いたく立た〕ず（=〔トテモ切レル〕ワケ

デハナイ→タイシテ切レナイ)」であって、ここで否定されるのは「いたく」という極端さである(中村幸弘1995)。「いたく…ず」「いと…ず」は、一般に、「たいして…ない」と解釈される。

- (6) いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。(源・桐壺)

[67]

対偶中止

下線部を訳しなさい。

たとひ舞を御覧じ、歌を聞こしめさずとも、御対面ばかり候うて、かへさせ給ひたらば、ありがたき御情けでこそ候はんずれ。(平家1)

否定のスコープに関連して、このような構文にも注意が必要である。下線部は、「舞を御覧になり、歌をお聞きにならなくても」の意ではなく、「舞をご覧にならず、歌をお聞きにならなくても」の意である。「聞こしめさず」の「ず」が「御覧じ」の方にも係っているのである。このような構文を「対偶中止」という。類例をあげる。例えば(7)(8)を「当世風で…」「不器量で…」と読むと、解釈を誤ることになる。(10)は現代語の例である。

- (7) [教養アル人ノ住マイハ] 今めかしく、きららかならねど、木だちものふりて、わざとならぬ庭の草も心あるさまに(徒然10)
- (8) [右近ハ] ^{かたち}容貌などよからねど、かたはに見苦しからぬ若人なり。(源・夕顔)
- (9) 悪しき事もよき事も、長くほめられ、長くそしられず。(宇治15-12)
- (10) 何人も、自己に不利益な唯一の証拠が本人の自白である場合には、有罪とされ、又は刑罰を科せられない。(日本国憲法第38条3)

[68]

否定繰り上げ

下線部を訳しなさい。

[薫ハ] げに、さるべくて(=当然ソウナルハズノ因縁ガアッテ)、いとこの世の人とはつくり出でざりける、[仏菩薩ガ] 仮に宿れるかとも見ゆること(=芳香)

添ひたり。(源・匂兵部卿)

「難しいとは思わない(=難しくないと思う)」のように、主文中の否定が補文に係る解釈をもつとき、これを「否定繰上げ」という。

- (11) 主とおぼしき人は、いとゆかしけれど、見ゆべくも構へず(=見ユベカラズ構フ)。(源・玉鬘)
- (12) 悔ゆれども取り返さるる 齢^{よほひ}ならねば(=悔ユレドモ取り返サレヌ齡ナレバ) (徒然 188)

次例は逆に、補文中の否定を主文に動かした方が分かりやすい。

- (13) 捨てたれど隠れて住まぬ人になれば(=隠レテ住ム人ニナラネバ) なほ世にあるに似たるなりけり (山家集)

[69]

「飽かず」

下線部を訳しなさい。

- ① 明け暮れ見奉る人だに飽かず思ひ聞こゆる [明石姫君ノ] 御有様を (源・初音)
- ② 中納言殿にまだ知られ奉り給はぬことを [落窪姫ハ] 飽かず思す。(落窪)

「飽く」に「飽きる→不満だ」、「飽きる→充分満足する」の両義があるため、その打消形にも両義があることになる。①は前者の打消で「飽きることがないほど素晴らしい」の意、②は後者の打消で「満足しない→不満だ」の意。

[70]

肯否の通用

次の「おぼろけ」の意味を答えなさい。

- ① 太政大臣には、おぼろけの人はなすべからず。(大鏡)
- ② おぼろけの願によりてにやあらむ、風も吹かず、よき日出で来て、漕ぎ行く。(土佐)

「おぼろけ(なり)」は、本来「並一通りであるさま、普通であるさま」を表

すが、②のように「おぼろけならず」と同意で用いられることがある。次例の「おぼろけならでは」は「おぼろけにては」の意である。

- (14) [明石君ハ] おぼろけならでは [尼君ト] 通ひあひ見給ふことも難きを
(源・若菜上)

次例の「思はぬほか」「思はざるほか」はともに「思ひのほか」の意で同意、

- (15) かかるほどに、思はぬほかに、仁治三年の秋八月十日あまりのころ、都
を出でて東^{あづま}へおもむくことあり。(東関紀行)
- (16) [定家ガ] このたびの御百首の召しにまかり入らずなり候ひにける、思は
ざるほかの憂へ嘆きに候ふなり。(正治二年俊成卿和字奏上)

次例の下線部は、ともに「怪しい物」の意で同意である。

- (17) a 木霊など、怪しからぬ物ども所を得てやうやう形をあらはし(源・蓬
生)
- b 内にはいつしか怪しかる物など住みつきて(増鏡15)

次例は、「障子が長い間開かなかった」の意であるから、「御障子開かぬこと、
無期になりぬ」といっても同じことになる。

- (18) 御障子立てて、「御扇鳴らせ給へ」と[中宮ガ帝ニ]申させ給ひければ、
[ソノ後] 御障子開くこと、無期になりぬ。(讃岐典侍日記)

次のような表現も、よくみるところである。

- (19) 夜の明けはてぬさきに(=夜ノ明ケハツル前ニ)[源氏ヲ]御舟に奉れ。
(源・明石)
- (20) 冬の夜の闇の闌の板間は明けやらでいく度となく(=イク度モ)降る時雨か
な(草庵集)

「数なし」には「数少ない」の意と、「数限りない、無数である」の意とがある。

[71]

[…間]

下線部の意味を答えなさい。

- ① 長雨、晴れ間なきころ(源・帚木)
- ② 雨間も見えぬ五月雨のころ(続後撰212)

「…^ま間」には、「…ている（のある）間」の意の場合と、「…ていない（のない）間」の意の場合とがある。①は前者、②や「雲間」「^{ひとま}人間」は後者。

[72] ————— 「誘はれず」「思ひ残すことなし」

下線部を訳しなさい。

- ① 親の、常陸（＝常陸介）になりて下りしにも誘はれで、[源氏ノ供トシテ須磨ニ] 参れるなりけり。（源・須磨）
- ② [姫君ハ] いかにか思ほし残すことなからむ。（源・末摘花）

①のような「誘はれず」は、「誘いがなかった」ではなく、「誘いに対して応じなかった」の意。②は「思わない所がない」、すなわち「物思いの限りを尽くす」の意で、現代語の「思い残す所がない（＝満足である）」の意ではない。

[73] ————— 「…ずなりぬ」

下線部は、どういう事態がどうしないことになったのか、説明しなさい。

- ① 船の人も見えずなりぬ。（土佐）
- ② 楫取、「今日、風、雲の気色はなはだ悪し」と言ひて、船出ださずなりぬ。（土佐）

「…ずなりぬ」には、「今までしていたことをしなくなった」の意と、「最初から最後までしないままになってしまった」の意とがある。

[74] ————— 二重否定・修辭否定

次の打消表現にはどのような表現効果があるか、説明しなさい。

- ① 二日といふ夜、男、われて（＝無理ニ）「あはむ」と言ふ。女もはた、いとあはじとも思へらず。（伊勢 69）
- ② 見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ（新古今 363）

- ① 否定の状態を否定したものを「二重否定」という。二重否定は、肯定の状

態なのかどうかが不分明の、複雑に揺れ動く曖昧性をもった表現をつくる。

- (21) ことにふれて、心ばせ、ありさま、なべてならずもありけるかなと、
[源氏ハ明石君ヲ] ゆかしう思されぬにしもあらず。(源・明石)

◆次例は、三重否定で、「いぶせからずと思ふ (= 気が晴レル)」の意である。

- ・ 自らの (= 有明ト直接才会イスル) 御ついでではかき絶えたるも、いぶせからずと思はぬとしもなくて、また年も返りぬ。(とはずがたり)

◆漢文訓読体における二重否定は、強い肯定を表す。

- ・ 奏する所の詩歌、いづれもいづれも祝言にあらざるはなし (= 祝言ナリ)。(保元・金刀比羅本)

② そこにない花や紅葉を、わざわざ「ない」と表現することによって、ないはずの花や紅葉が一瞬、浦の夕暮に現出して、それが打消される (佐藤信夫 1978)。このような手法を「修辞否定」という (野内良三 2005)。(22) は桜花の残像、(23) では、「散らぬ梢に」という表現によって、今後起きるであろう花吹雪が一瞬現出する。

(22) 花は散りその色となくながむればむなしき空に春雨ぞ降る (新古今 149)

(23) 桜花散らぬ梢に風ふれて照る日もかをる志賀の山越え (拾遺愚草)

[75]

否定と限定

下線部はどのような意味か、説明しなさい。

- ① 法師ばかり羨ましからぬものはあらじ。「人には木の端のやうに思はるるよ」と清少納言が書けるも、げにさることぞかし。(徒然 1)
- ② a なぐさめに煙ばかりは絶たねどもさびしきものを冬のすみかは (後鳥羽院御集)
- b 神無月時雨ばかりは降らずしてゆきがてにのみなどかなるらん (伊勢集)
(詞書「かく言ひて、みづからもえ来で、初雪の降る日」)

否定文中に限定語句がある場合、どのような意味を表すかという問題。

二重否定「羨ましくなくはない」は「羨ましい」の意であるが、①のような「…ばかり…ず(なし)」は「…ほど…であることは他にない」、つまり「…が

最も…である」の意を表す。①は「法師が最も羨ましくない」の意。

- (24) ある人の、「月ばかり面白きものはあらじ」と言ふを（徒然21）
 (25) 命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。（徒然7）
 (26) 人の亡きあとばかり悲しきはなし。（徒然30）
 (27) 今日ばかりあはれと見ゆる空はあらじわが身も秋も暮れぬと思へば（秋風和歌集）

次例は「駿河の清見が関と、逢坂の関とばかり [アハレナル所] は [他二] なかりけり」、つまり「駿河の清見が関と逢坂の関とが最も印象に残った」の意。

- (28) こころの (=多クノ) 国を過ぎぬるに、駿河の清見が関と、逢坂の関とばかりはなかりけり。（更級）

◆現代語の次の例をも参照。

・a 面白いことはなかった。／b こんなに面白いことはなかった。（=一番面白い）

◆「…のみ…ず」は、「…だけ…ではなくほかも」「…なのは…だけではない」の意を表す。

・松の下紅葉など、音にのみ秋を聞かぬ（=風ノ音ダケデナク色ニモ秋ヲ聞ク）顔なり。（源・若菜下）

②の ab が異なる意味を表すのは、現代語で、「山田だけが男ではない」が両義文であるのと同じである。

別冊 例題文現代語訳

第8講 (pp.52-59)

[65] ①桜の花は早く散ってしまうとも思われぬ。人の心が（早く移り変わってしまった）風も吹ききれぬ。②→ [6] B ①。③嘆くけれどもなすべき手立てを知らないで、恋慕うけれども逢う方法がないので。④丸い井戸の囲いと背くらべして遊んだ私の背丈は、（その井筒よりも）高くなってしまったようだ。あなたと会わないでいる間に。⑤数えると尽きないものは、私が積み上げた稲と、私が積み重ねた年の数であったのだ。 [66] ① a 諸天（天上界の神々）は、太子に随行して、その所に着いて急に（姿が）見えない。b 「御杯が遅い遅い」と言うけれども、すぐには持って来ない。…そうして（やっと）、御杯を差し上げる。②優れた工匠は、少し鈍い刀を使うという。妙観（奈良時代の名工）の刀はたいして切れない。 [67] たとえ舞を御覧にならず、歌をお

聞きにならなくても、御対面だけはございまして、お帰しになったならば、この上ないお情けでございましょう。[68] (薫は) 本当に、当然そうなるはずの因縁があって、たいそうこの世の人ではな (いくらい素晴らし) く作り出された、(仏菩薩が) 仮に宿ったのかとも思われること (芳香) が備わっている。[69] ①明け暮れお見申し上げる人でさえ、飽きることがないほど素晴らしいとお思い申し上げる (明石姫君の) 御姿だから。②中納言殿にまだ知られ申し上げなさらぬことを (落窪姫君は) 物足りなくお思いになる。[70] ①太政大臣には、並一通りの人を任じてはならない。②並一通りでない祈願によってなのであろうか、風も吹かず、よい天候になったので、(船を) 漕いで行く。[71] ①長雨で、晴れている間がないころ。②雨の降り止んでいる間も見えない五月雨のころ。[72] ①親が、常陸介になって (任国に) 下ったのにも誘いに応じないで、(源氏の供として須磨に) 参上したのだった。② (姫君は) どんなに物思いの限りを尽くしていらっしやるだろう。[73] ① (見えていた) 船の人も見えなくなりました。②楫取は、「今日は、風や雲の様子がたいへん悪い」と言って、(結局) 船を出さないままになってしまった。[74] ①二日目という夜、男は無理に「逢おう」と言う。女もまた、強く逢うまいとも思っていない。②見渡すと、花も紅葉もないのだった。この海辺の漁師の小屋の (あたりの) 秋の夕暮れは。[75] ①法師ほど羨ましくないものは (他に) ないだろう (法師が最も羨ましくないものだろう)。「人には木の屑のように思われるよ」と清少納言が書いているのも、なるほどもっともなことだよ。② a 慰めとして (柴を焚く) 煙だけは絶やさないが、寂しいからなあ、冬の (山里の) 住みか。b 十月に時雨だけではなく (雪も) 降って、どうして雪交じりにばかりになって、私も行くことができずにばかりになっているのだろう。

重版3刷出来

古語辞典の一步先に行く便利さ。欲しい情報が手に入る!!

文法・文学研究者・学習者必備書! 最大規模の古典文法書

小田 勝著

実例
詳解 古典文法総覧

A5上製・函入・752頁
本体8,000円+税
ISBN978-4-7576-0731-6



1. 英文法書と同様の形式で記述。
2. オーズドックスな解説で古文教師の強い味方。
3. 13年をかけて幅広い古典作品の用例を悉皆調査。
4. 類書のない記述密度と規模。
5. 最新の古典文法研究の成果を採用。
6. 古語辞典では決して引くことが出来ない事項を参照できる。
7. 古文解釈辞典としても重宝。

*パンフレット呈上